

地球・人間圏科学の現状と課題

U053-3

奥村 晃史 [1]

Koji Okumura[1]

[1] 広島大・地理

[1] Dept. of Geography, Hiroshima Univ.

本報告の対象である地球人間圏科学という新しいことばは、第20期日本学術会議地球惑星科学委員会に設けられた地球・人間圏分科会に由来する。この分科会の目的は、地球の活動と人間の活動の相互作用が引き起こす地球的な現象や社会的問題に関して、地球科学のあり方、社会的提言、関連研究コミュニティとの連携について検討することにある。この目的を達成するために、地球・惑星の自然現象と人間活動とのインターフェースに近接する科学分野の研究者が協力し合って多面的な議論を深めつつある。自然の側から地球人間圏科学を考える場合、人間活動の場としての自然の成り立ちと自然が人間に与える影響が主要な課題となる。従来の地球惑星科学の幅広い分野がこれに関わるが、なかでも地震学、火山学、応用地質学、第四紀学、自然地理学、応用地質学などが深く関わっている。一方人間活動の側からのアプローチとしては、人間がどのように自然環境の変化に対応したかを解明する視点に加えて、人間が自然を改変し現代では地球システム全体に大きな影響を与えているとの視点も重要となっている。これらの視点からは、人類学、考古学のように自然科学の側面を強くもつ研究分野だけでなく、人文科学・社会科学と強く結びついた人文地理学や、農学・工学等に関連する分野も地球・人間圏科学の一部を構成している。このような極めて学際的で、ある意味混沌とした研究者の集団は広い意味での地球惑星科学に新しい観点をもたらすポテンシャルを有する。方法論や価値観を異にする研究者の集団がそれぞれの研究分野に向けて発散することを防ぎつつ新しい観点から成果をあげるための模索が現在進行中である。その一方で、地球・人間圏科学の視点がきわめて重要な課題に関しては研究と社会的提言の両面で進展があった。その課題として、地球環境変動、自然災害、および地球観測情報が最も顕著なものである。これらの研究課題について、地球人間科学の視点を確認しつつ、成果と課題を検討する。